

# 二本松市の指定文化財

⑧

## 市指定 『龍泉寺観音堂の算額』

二伊滝・龍泉寺の観音堂に奉納された算額です。算額とは、和算家が自分の発見した数学の問題や解法を書いて社寺などに奉納した絵馬のことをいいます。

杉材の一枚板で、縦九七・六cm、幅三四・二cm、厚さ一・三cmを測ります。寛政十二年（一八〇〇）三月、亀谷の和算家高田要五郎一正が奉納したもので、県内に残存する中で最古といわれています。

額自体の保存状況は腐朽もなく良好ですが、墨書された算術文などは風化のため下部六分の一ほどを除いて消失しています。しかし、筆跡の木質部が残り、何とか判読できる状態にあり、また上部に白



色顔料で描かれた米俵も辛うじてその姿をとどめています。奉納者の高田は、最上流始祖である会田安明の第一の高弟で、二本松藩校教授であった渡辺一（号は東岳）の門人です。藩命により六年を費やし、郭内および市中分間図調製を完成したり、測量器見盤を發明し藩に献上したりしたともいわれています。

また、測量に長じ、器械を用いず目分量で測つても寸分の誤差がなかったことから、「分量先生」とも呼ばれ門人は千人を超えたといえます。当算額は二本松藩和算史の貴重な資料として価値が高いことから、平成十四年に有形文化財「歴史資料」に指定されました。

## 市指定 『大日如来坐像』

渋川の寿福院に安置されている金銅仏で、像高一四cm、台座を含む総高一八〇cmを測ります。



本像は、月照海上人の誓願によって造営されたといわれています。口伝によると、上人は九州生まれで幼くして仏門に入り、その後各地を巡り奥州の霊場・出羽湯殿山にいたり、火断ち木食苦行を積んだりして、仏道の奥義を極めた後、寿福院に籠居し、さらに苦行を続けて数多い奇法奇術を行ったといえます。

その噂が相馬藩主の知るところとなり招致され、病者を癒し衆人を救ったその効験によつて、藩主より報酬として金剛界・胎藏界大日如来尊像一対の金銅仏を賜りました。帰路に際し、川俣に金剛界像を安置し、胎藏界像を持ち帰り当院に安置したと伝えられています。

蓮台には、铸造および安置にいたった経緯などが刻されています。それによると、铸

造の趣意は藩主の下賜だけではなく、多くの衆人による篤志寄附であり、正徳五年（一七一五）に製作されたことが分かれます。昭和五十三年（一九七八）有形文化財「彫刻」に指定されました。

## 市指定 『雲堂和尚梵字石』

下長折の渡辺正美氏宅敷地内に長安寺跡地があり、その上方の稲荷神社境内に所在する梵字石です。梵字とは、梵語を表記するために用いられた古代インドの文字（サンスクリット）のことです。

高さ五・一m、幅五・四mの露出している花崗岩の巨石に梵字が薬研彫りで刻まれています。不動明王を表す「サ」、金剛夜叉明王を表す「ウン」の三字です。

「ウン」の下方には「南無一十大王五月十六日高野山雲堂老比丘書」とあり、高野山の高僧である雲堂天岳による書をもとに刻されたものです。さらに、天和二年（一六八二）

に近接した除の八右衛門信供と日向の千右衛門安仲が刻したことも分かれます。文字は風化もなく、鮮明・見事で、平成十年に有形文化財「史跡」に指定されました。なお、雲堂和尚は藩主丹羽光重の帰依を得て、寛文十二年（一六七二）に根崎の遍照尊寺を開基し、その法力・靈験逸話は数多く、領民から「生き仏」や「今弘法大師」と称賛されたといわれています。貞享四年（一六八七）高野山に帰山したものの、不遇のうちに元禄五年（一六九二）六四歳で没しました。

